

# 創出した水辺ビオトープにやってきた生きものたち

令和5年度地域政策研究センター 地域協働研究【ステージⅠ】採択課題

課題名：木賊川遊水地に創出したビオトープとその周辺における生物相の評価

研究代表者：総合政策学部 鈴木正貴

課題提案者：たきざわ環境パートナー会議

研究メンバー：渋谷晃太郎（岩手県立大学名誉教授）、島田直明、辻盛生（総合政策学部）

技術キーワード：水辺ビオトープ、生物多様性、絶滅危惧種

## ▼研究の概要（背景・目標）

木賊川遊水地造成予定地では、希少野生動植物が数多く確認されている。そこで、これら動植物の生息・生育環境保全の一環として、地域住民と大学教員、学生が協働でビオトープを造成した（図-1）。本研究は、このビオトープが植物および昆虫類に及ぼす効果の検証を目的とした。

## ▼研究の内容（方法・経過）

1. 調査対象：ビオトープは、人力での掘削により2021年4月に完成した。面積は約35×15mで、水源は旧農業水路からの引水である。
2. 調査内容：ビオトープを対象に、植物相調査を実施した（2023年4月～10月、計11回）。また、昆虫相調査も実施した（2023年5月に2回、7月、8月、10月に1回ずつ）。さらに、ビオトープおよび周辺域を対象に、ゴマシジミおよび本種の宿主であるハラクシケアリの生息状況を調査した（2023年7月～8月）。

## ▼研究の成果（結論・考察）

1. ビオトープの植物相と維持管理手法：植物相は36科86種の植物が確認され、希少種は6種、外来種は11種であった。要管理種であるカサスゲは、6月上旬までに抜き取り除去した方が良いと考えられる。
2. ビオトープの昆虫相：昆虫相は9目73科160種が確認され、希少種は5種であった。イネゾウムシ科ウキクサミズゾウムシは県内初記録となった。今後、トンボ目が生息するには、開水面保持と沈水・湿生植物の定着が必要である。
3. ゴマシジミとハラクシケアリの生息状況：ゴマシジミの最大飛翔個体数は17個体で、発生は7月下旬、収束は8月下旬であると考えられた（図-2）。本種の宿主ハラクシケアリの生息条件は、既往の報告にある湿潤な土壌だけではなく、陰影部の必要性が示唆された。

## ▼おわりに（まとめ・今後の展開）

今後もビオトープを対象にした動植物の調査を継続することで、植物相は提案した管理手法の効果検証を、昆虫相は年変動を網羅した種組成の把握をそれぞれ実施する予定である。

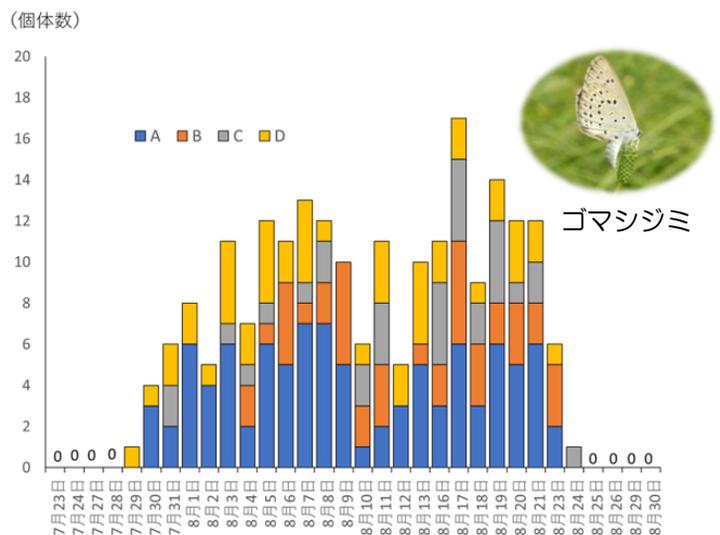
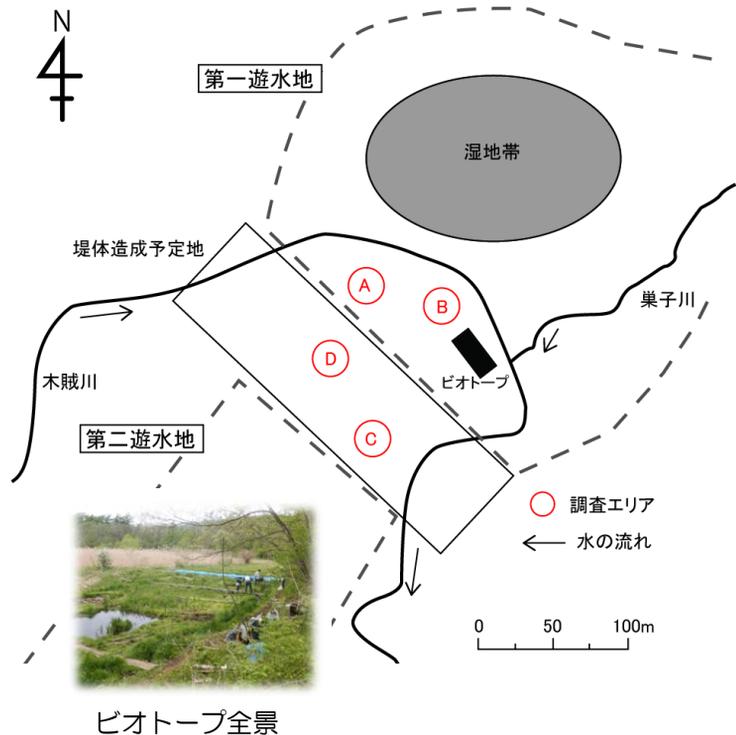


図-1 各調査日におけるゴマシジミのエリア別最大確認数（「0」は未確認であったことを示す）